4
211

五柳散士編著

福島騎馬旅行

少佐

發行書肆 東雲堂藏

4°, 82/XXVI.

福嶋少佐之肖像

序

古來我邦騎馬の爲よ芳名を後世に遺せしもの少なからぎ源廷尉が鵯越佐々木高綱が菟道川の先登等皆是壯は即ち壯なりと雖ども是れ一時の事御のみ現今福島少佐は單騎遠く海外に獨行しウラル嶺を越へ西比利亞の廣原を過ぎゴビ大沙漠を横貫し千辛萬苦を嘗め今や歸朝の期將よ近きにあらんとす實に古今卓絶世界無比の大事業と云ふべし吾友五柳散士書を編むに際し聊か一言を卷首よ加へ以て世に公にするよ至れば少佐が功勞に報ゆるに足らぎと雖ども亦以て其名譽を天下に鳴らすに庶幾からん乎

明治癸巳第一月

春莊護人識

騎馬旅行紀の巻首に書す

日本の名譽を齎らし軍人の名譽を齎らして歸朝せんとする一人傑あり日本國長野縣信州松本の人なり名は安正姓は福島官は則ち陸軍少佐日本公使館附武官として歐洲日耳曼國の首府ベルリンに駐在せしが茲に一の壯圖を抱きて東方に向つて歸途に就けり

少佐は如何なる地を經て歸朝せんとするか彼はベルリンを發したり直ちに東してモスコーに到れりモスコーハ露の舊都なり彼ハ歐羅巴露西亞を過ぎてウラルの山脈を打ち越へたりウラルの山脈を打ち越へて亞細亞露西亞に入り西比利亞に入り西比利亞より清國上海に出でんとするなり上海よりして歸朝せんとするなり

少佐は何に乘つて旅行しつゝあるか舟か舟に非ざるなり橇か橇に非

ざるなり車か車に非ざるなり彼は騎馬旅行を企てたるなり彼が乘る所の馬は凱旋（ジョン）と云へる駿馬にてありし然れども凱旋ハ不幸にして半途疾病に罹れり乃ち更に一の騎馬を購へり其名を烏拉（ウラル）と云ふ今や彼は遠征の苦樂を此烏拉と共にしつゝあるなり

少佐は如何なる扮裝なるか彼は軍服を纏へり下襦袢の着換の外佩刀及び二個の短銃を携ふるのみ斯る大膽なる遠征斯る勇敢なる旅行は世界古今稀なる事に屬す殊に西比利亞と滿洲とを横斷して西洋より東洋ゑ歐羅巴より亞細亞に然も其極東に川又川を打ち渡り山又山を乘り越へて雪降る寒夜を厭はゞ烘くが如きの夏日をも意とせゞ單騎して彼の人跡未だ曾て之れなきの地に入りて親しく探驗的旅行を遂ぐること少佐の如きは恐らくは古來絶無なるべし

然れば遠征は實に著るしき注意を世界列國の人士に惹けり歐米の諸新聞紙上嘖々此事を傳へざるは莫し他洲他邦の人にして已に此の如し豈に少佐と其洲を同ふし其邦國を同ふする者誰か傍觀すべけんや或る者は歡迎の準備に取り掛れり或る者は詩歌を贈りて其行を壯ゑせんとせり或は銅像を建立せんと言出せり特に　優渥なる我が　陛下ハ御手許金を下賜あらせられ以て此旅行の費に充たさしめ給へり亦以て此行が如何なる歡待を受くるかを察するに足るべし

抑も少佐が此大膽冒險の旅行を思ひ付きし原因は那邊ゑあるゝ或ハ云ふ其筋の内命に出ると或は云ふ自から志す所ありて然るなりと或は云ふ一婦人の愛より事茲に到れるなりと吾人は其何の爲めに將た何の故に今回の行あるかを詮索するを要せゞ只實に此行が持ち來す

所の利益の大なるべきを喜ばざんば非ざるなり

熟々目下の狀景を察するに宇内の大勢は駸々として進むと雖ども之と同時に弱肉强食侵略横奪の勢も亦進む一面より之を觀すれば平和、自由、平等の氣運は駸々として世界同胞の間に發育すと雖ども更に一面より之を察すれば則ち此の如く恐るべきの黑雲歐亞の天を蔽ふを見るバルガンの半島雲頗ぶる急にして鷄林の原野風甚だ烈げし露鷲爪を鳴らし英獅牙を磨く露領西比利亞内地の如き滿洲内部の人情の如き深く察し詳に知り大に計畫する所なかるべからざる將た大に備ふる所なかるべからざる吾人は陸軍武官か陸續として探驗に從事せん事を冀望せるのみならず商家、學士等亦勉焉事に茲に從ひ廣く新發見を世界に紹介するの勞を取らんことを冀望せざんば非ざるなり

元來我日本人は冒險的氣質に富めりと言ふべからざる少佐今回の擧の如き實に好摸範を示す者と謂つべし最も之を既往にしては山田長政の如き濱田彌兵衞の如き伊達の家臣支倉某の如き其他當時に於て海外に向つて勇猛敢爲の冒險的事業なきにあらず且つ陸軍參謀本部に於て派遣せし所の探驗者が業に既に其功を奏したることを聞かざるにあらず然りと雖ども世界人士の耳目を聳動したること少佐の如き者は蓋し近來只一あるのみ

然れども少佐が負べる此の名譽は獨り少佐の名譽に非らずして我軍人の名譽我日本の名譽たることは冒頭揭擧したるが如し近來世界の大事業多くは歐米人士によりて成し終らるゝの遺憾ある今日に於て特に我日本人中より出でゝ斯の偉業に該り歐米人をして感嘆措く能

はざらしむ吾人豈に快哉と叫ばざるを得んや

嗚呼今や少佐遠征の事を叙し其旅行を壯にする者ある寔に宜べなり

と謂つべし思ふに本年三四月の交に至らば勇壯なる少佐は空前絶後

の單騎旅行を遂げ來りて四千萬の同胞に見ゆるに至るべし聊か感ぜ

る所と聞きし所とを書して之が巻首に付し併せて少佐の健康を祈る

福島小佐 騎馬旅行

騎馬旅行

五柳散士 著

福島小佐は信州松本の人にして久しく支那及び亞米利加等に遊び最も清国の語に通じ且つ獨、佛兩國語を能す剛毅にして高き歐米人の勧誘に応じて露国の紀行を企てざる冒險事業も未だ曾て企てざる冒險事業なるの紀行概ね今回れ遠征に於ては先づ伯林を盛京に出で露国に赴き彼得堡より摩斯科、加森を經て烏拉の山嶺を越え阿摩斯利塞米巴拉丁斯科を過ぎて外蒙古に入り頷爾頷の三大部を横斷して西伯利亞の義爾克斯科に達しこれより西伯利亞の本道に沿ふて浦潮斯德に出で更に轉じて西方滿州に進み吉林、盛京等の諸城を經、山海關より直隷省に

入り北京を過ぎて天津より乘船歸朝すべきの計畫を定め尙は且つ其際白河の凍合するあらば更に騎乘して上海に出づるの見込あり其行程實に一万六千吉米餘(凡そ日本の三千二百里)單騎舟車に力を借りず携ふる所の護身器は唯軍刀一振、短銃一挺、其旅裝は身に軍服を着し毛皮の外套を纏ひ馬鞍に四個の革袋を附しこれに福紬、袴下、靴下、各一着、手巾六枚、手袋二對、毛帽二箇、日時計、晴雨計、地圖、製圖器、蹄鐵器、擦毛道具を入れ鞍後に外套袋と豫備食料乃麻布袋とを附したるのみ別に行李を携帶せざ其騎用する所の馬匹は半血英國產の逸物にして乘馬會社ヌッテルザールより買取りたるものなり社主は少佐の勇壯なる遠征乃計畫と聞き半價にて之を賣り渡さ以て義俠の志を表したる由少佐は其馬の名を改めて凱旋と命じたり万里に遠征恙なくして日本に歸り大に國乃爲めに盡

す所あらんとそるの意を寓するもの歟、獨逸の騎兵將校は二月の寒天に寒地に向ひ又酷暑を冒して廣大なる沙漠を跋渉そるに於ては馬匹は果さて能く之に堪ふべきや否やと頻りに種々の想像を描き少佐旅行の成蹟は結局騎兵の價値に大關係を有するものなりと語り合へる趣なり

少佐は伯林出發の前、獨逸皇帝陛下に御暇請れ謁見を願ひ出でしに速に允可せられたるに由り一月十二日午前十時少佐は兒玉陸軍少將(陸軍次官)と共に拜謁せり　皇帝陛下は懇渥なる勅語を以て少佐の解任歸朝を惜むの意を述べらを更に露國內地旅行の計畫に就き仔細に尋ねらを少佐れ奉答を聞いて其容易ならざるを察せらるゝの容顏あり少佐の健康にして日本に歸らんことを望み給ひ且つ終りに臨みて小松、北白川兩宮殿下並に桂陸軍中將(今の第三師團長)へ宜しく傳言

すべしとの御言葉ありしと又謁見の前夜皇帝の侍臣より電信を以て少佐に勳章を賜はるべき旨を傳へ且つ頃刻にして之を少佐の旅寓に送れり盍し外國の使臣に向つて勳章を授與するは其起程の後に於て外務大臣より駐劄公使の手を經て之を送り屆くることの常例となり居るが如くなをば少佐の勳章拜受は全く特別の手順に出でしものなるべし其勳章も赤鷲第三等にして全く常格に擢んづると云へり

少佐は二月十一日(即ち紀元節の祝日)に匹馬凱旋に鞭うつて萬里遠征乃途に上りたり在府れ知人に別を告げ伯林城を後にすれば凱旋風に嘶いて足搔を早むれども涙を隱して前途を祝せし交友の情思ひ回らしては西伯利亞の瘴烟毒霧を一着の外套に防ぎ蒙古の猛獸毒蛇を馬蹄に踏み躙らんとする流石れ少佐も坐ろに無情を覺えしなるべし其日は五十吉羅

を行きてミユンヘベルと云へるに宿り翌日ゾンチンブルとに着き其次の日にシユウエーリンに到着せり此兩地の間は道路大概深林の中に在りて人家稀に行人絶え偶ま薪材を運ぶの車輛を見るのみ朝來西風殊に烈しく寒威漸く加はりて羅氏の四度に下り道路凍合まて鐵の如く頗る馬蹄に不便なるを以て屢々林中を驅り漸く進んで三十餘吉羅に達したるとき馬稍や疲れ少佐亦空腹を覺えたり雪降り風益々甚だ寒と雖ども更に人家を見ず鞍を下つて馬を休めるをより之を曳いて徒歩すること二吉羅餘始めて一孤屋を見立寄りて一杯の珈琲に喉を潤し休憩一時許人馬共に勇氣を加へ二時半頃更に發程せり滿目深林にして白雪皚々たりしと十五日亦五十吉羅を驅り午後五時ポーセンに着しければ其地の司令官中將ベンニング氏は直ちに訪ひ來りて兵僕一名

を附せり其夜は將校團の案内を受け翌日は乘馬の保養旁々瀛車にてカーウサッチュと云へるに遊び十八日午前九時ポーゼンを發して四十六吉羅を行きウレスエンに一泊、十九日午前九時十五分發程二十吉羅にしてストラルコウオーに着せり此地獨逸鐵道の終點にして此方面國境の小村落とす

十九日午後一時露國に入れり税關をも滯りなく通過し同五時頃三十吉羅にしてコーニンに着せり人口二千の小市街なり輕騎兵第十三聯隊を屯す市外四吉羅の地に聯隊の將校一同樂隊を率ゐて迎へ名譽の樂譜を奏して市街に案内し直ちに將校團に誘ふて晩餐を饗し其間亦奏樂あり馬は聯隊の廐に曳き入れ少佐には別に兵僕一人を附して十分鄭重に待遇しり、二十四日舊波蘭國の都ワルシャウに着し有名なる馬醫某に乘馬凱旋の診斷を請ひしに馬醫は其健强に驚けりと、ワ

ルシャウに滯留三日にして廿八日午前十一時發程せり騎兵旅團長少將オッヘンブルグ氏幷に槍騎輕騎二聯隊の將校及二聯隊の樂隊は送つて市外に到る五十五露里(一露里は凡ろ九丁四十間餘)にしてブレスックに着き二十九日五十四吉羅にしてオストロレンカに達せり到る所待遇益々厚し翌日馬背小恙の爲め其地に滯留せり寒暖計零下二三度、三月二日三十四露里にしてロムヤに着せり寒暖計零下七度、同三日四十三露里を行きてシュープチンに達す寒暖計零下十度、四日五十三露里にしてアングストウォーに着けり寒暖計零下十四度、此數日來た寒氣日に加はり四面皆雪にして道路堅滑騎行易からず凱旋の疲勞甚だし然れども待遇は日に厚く到る所、軍隊樂隊將校を以て送迎せられ士民群集敬禮するを常とす又常に聯隊の案内を受け且つオストロレンカ、ロムヤ、シュー

アケンに於ては何れも少佐に贈るに紀念章を以てせり爾後日々六十餘露里を行きコヴノ、チコーナベルとに各一日を滯在し三月十七日ポコッウに着き聯隊の客として兵營に宿し翌日亦同地に滯留せり寒氣は零度下十度以内なれども積雪深くして行走に苦むこと多く暴風雪を捲いて眼を遮ること屢々なり二十四日午後四時人馬恙なく露京聖彼得堡に着せり伯林より露都に到る行程三百三十六吉羅と一千三百四露里にして之と吉羅米突とせば總計大約一千七百二十五吉羅なり日を費したること四十三日、途中の滯在十日を除けば三十三日にして一日平均五十二吉羅を驅りたる割合なり、尙ほ少佐が露都より旅中の狀況を概括して發したる報告の中に左の如きものあり

露國に入りし後大約一千露里間は冬時數月の積雪にして

朔風屢々雪を吹き道路深林の間に横はりて人煙少く寒氣は常に零點以下にして最も低下せしい羅氏の零下十四度とも此時暴風雪を捲いて面を打ち遺憾ながら少なく寒き樣に覺えたり然れども毛帽を用ひず耳鼻を蔽はゞ安正の鐵骨熱腸酷寒に抵抗し得るの度合を試み推して西比利亞の多日決して意とするに足らざるを知れり

騎馬の時間は七八九時間を多しとす間々道路最も騎行に不便なるが爲め十二時間餘に至りしまこわり然れども未だ嘗て疲勞を覺えずとなく常に凱旋が百里の行を爲さゞるを惜めり旅中僅に兩度風邪の爲め頭痛を感せしことありしも强行發汗滴藥を用ひずして全快せり

今回安正の旅行は意外に天下の注意を喚起し安正の言行常に各國の新聞に記載せらるを實に漸愧に堪へず尙ほ小心

愼重決して我帝國乃威風、軍隊の名譽を汚さゞるに注意仕居候殊に露國に於ては待遇最も鄭重にして駐兵の地を通過する毎に軍隊樂隊將校等を數里の外に出して送迎し集會場或は將校隊長の自邸に誘ひ賓客の禮と以て叮嚀の接待を爲し或は盛宴を張りて大日本皇帝陛下の聖壽を祝し我帝國軍隊の隆盛を嘉し次で安正の遠征能く其目的を達するを祈る等之を略言すれば軍人最大の榮譽を以て安正と待遇し左の七ヶ所に於ては安正に贈るに紀念章を以てせり又聖彼得堡に於ては騎兵乘馬學校長特に先年冬時西比利亞と騎行せし哥薩克中尉ペシコフ氏を派して途に安正を慰問し露京に到着の日同學校れ佐尉官數名騎馬にて府外數里れ地に安正を迎へ誘ふて校中準備の室に宿せしめたり云々

少佐は騎兵學校れ將校數名に誘はれ賓客として校內準備れ室に入り懇切なる饗應を受け後ち公使館に到り邦人と談笑して旅情を慰め三十四日目にて浴を取り積垢を洗ひ落して自ら體量の減じたるやを疑へりと、少佐と三月卅日ガチナの離宮へ參內して露國皇帝陛下に拜謁し又圖らず皇后宮陛下にも謁見の榮を得たり、兩陛下は何をも少佐の旅行よ關して種々の事を問ひ玉ひ後ち宮中よ於て午餐を賜はりたり扨て少佐は露都の滯在十五日にして四月九日午前九時起程せり騎兵將校數名は送て摩斯科凱旋門に至り哥薩克中尉ペシコフ氏は尙ほ同行をること數丁、明年浦潮斯德に於て氏と再會する事を約して別をたり少佐徐ろに征馬と驅つて行けば四月未だ春を知らずして白雪皚々たる萬里の平原に一線れ直路四十四露里(一露里凡ろ日本の九丁四十餘間)の遠きに連る

其間稀に點綴せる樹林には禽聲幽かにして寒村遠く烟は細し幸ひに降雪は凍合の堅道を包みて騎行に便に氣候は頗る温暖にして新聞紙に足と包ひの要なかりしと云へり其温暖の氣候あるものは即ち寒暖計零點下一度とす此日行程五十四露里、トスナと云へる寒村の驛舍に宿れり露國は饑饉の最中とて少佐が食卓に上るものは唯鷄卵と麵包と茶のみ翌日は三十二露里を行きて一小村の農家に投せり此日數度の小雨ありて氷雪將に解け始めんとし道路甚だ宜しからず路線亦一直にして大古の樹林屢々路に逼れり前夜無數の臭蟲(床蟲)に襲はれしかば手足熱を覺えて雪中旅行に寒さを知らむこれも天幸と喜ぶ少佐の境遇、想像し行けば夢を辿るが如し」

農家に到り着けば物珍らしとて近隣の不潔蠢愚なる百姓共多人數集り來りて種々の事と問ひ且つ語れり少佐は語學の

稽古と思ふて面白半分に之を相手にし大に旅情を慰めたりと云へり

四月十日に宿りたる百姓家は寒村乃木賃宿にして其不潔汚穢云はん方なく家族の室に隣りて唯一の狹き客室あり之が客たる者は着の身着の儘、土足と以て出入し木床に臥して眠るものなり主人は始め少佐をも此室に誘ひしかど如何にも堪へ難きより敢て主人に別間を請ひしに主人も十五箇月間馬に跨るの外國人と聞き半ばは憐れみて自分の寢室を與へたり少佐と此室にて仕事と終り書翰を認めて一時頃漸に就かんとせしも寢蚤は百姓老爺が年中穢れたる衣服にて眠りしものとて臭氣深く濕氣を帶び且つ白布なきを以て少佐は先づシャツを脱して枕を蔽ひ外套を布團の上敷と爲して漸く横になりたり然るに臭蟲は虱と共に大衆去て來り侵

し流石剛腸の少佐も轉々煩悶して三時乃時鐘を聞く迄遂に眠りに就き兼ねたり

十一日には四十九露里を行けり正午寒暖計六度に昇りて氣候漸く温和なる爲め氷雪解げ始めて馬蹄深く陷り驅行甚だ不便にして馬上九時三十分を費せり露都發程以來は沿道稀に寒村を見るのみあるが故に三日の間毎食單に麺麭と鶏卵、と茶の外は一物を得ず併し鶏卵は少くとも一日に三十餘箇茶も亦二十餘杯を呑めり

十二日には四十六露里にしてノヴゴールド市に着けり此地は名高き古市にして川に枕き湖に臨み風光頗る佳なり旅宿に達して先づ馬れ始末を爲し取る物も取り敢へず急ぎッップと燒肉とを食せり四日目の汁肉、大牛は物かは洵に美味の頂上と舌を皷したり食事中歩兵聯隊長來訪せり先年プレス

ラッ大演習の節に知り合ひし人なり

十三日には乘馬凱旋の爲め半日を休み正午發して二十五露里を行きプラニチーに投宿せり其起程に臨み聯隊長來て紀念章を贈り且つ數名れ將校と送て市外に到れば樂隊整列し日本進軍の譜を奏して別を告げたり又新聞通信者、營部長及び州廳書記官は送てプラニチーに到り肉類肉汁と命じて饗せり若し此助けなかりせば少佐は此日の晩餐も麺包と鶏卵に止まりしならん頻りに談笑の際窓外馬車の軋るを聞く即ち一營部三人れ令孃と共に二十五露里のノヴゴールドより三馬の橇を驅て少佐を見舞ふものなり三女皆な美且つ妙齡交々少佐と遠征の事を語れり

此地は元來鐵道の未だ敷設せられざるに當りては露京摩斯科間大驛の一にして驛舍常に三百餘頭の驛馬を繫ぎしかど

今は全く一寒村となり驛馬は僅に二三頭のみ旅舍固より粗末の小屋よりして不潔の毛皮を裏がへし一枚の白布を敷いて寢床となし濕氣深き滿團一枚を被て眠らざるべからず不潔は更に厭はせとも云ても又々無數の臭蟲と虱との攻寄するには堪へ難く兩手防御に暇なくして二時頃漸く疲れて眠れり」

十四日よは五十四露里にしてクレスツスに着けり

十五日　五十三露里

十六日　四十六露里

十七日　三十八露里

十八日　六十六露里

十九日には起程後三十二露里を行けば一條の河流融雪より水溢をして對岸に越ゆるよと能はず餘義なく其地の寒村に宿り翌日午後三時酒手を與へて舟子を勵まし氷塊激流の間に小

舟を操つりて河を渡りろれより二十六露里にしてトヴアーに達しヴォルガ河左岸の龍騎兵第一聯隊營に投宿せり

二十一日はヴォルガの出水非常にして氷塊絶間なく流れ來り激流岸と掠めて舟進むること能はざるに依り少佐はトヴアーに馬を駐め待つこと一日、

二十二日午前九時漸く船を出して對岸に渡り其の無難を喜び足搔と早めて進めば哀れ愛馬凱旋に取り一大不幸の事まろあれ即ち陽春四月の好天に寒地の露西亞も融雪の期となりたるが寒國の習ひとて表面は氷の儘にして内部より融解せるを以て馬蹄の水中に入る毎に氷片と蹄首と相摩擦し爲めに炎熱を起して凱旋は遂に蹄炎症を發したり去れど未だ甚しきよ至らざるより少佐は豫定の二十四日に摩斯科府に着し早速獸醫に懸けて之が治療に手を盡くし同府に滯在す

ること十二日間の久しきに亘り漸く馬病の本復を見て五月七日に摩斯科を發したり

摩斯科を發し五十一露里を行きてボゴロドスク市に宿れり

其日は馬健康なり翌日は四十五露里のパクロフに達すべしとて進みたるに病狀未だ全癒せず午後に至りて急に行歩に苦み少佐は府外二里の地より馬を下りて歩めり此日電電天地を動かし霰雹銃丸の如く左なきだに行き惱める馬の苦痛思ひ遣らるゝ程なり九日パクロフに滯在し獸醫を去て治療せしめ十日大よ快方を見るに至れり獸醫曰く行程三十五露里い敢て難からず行くべしと即ち發したれども其小距離に十時間を費して中間兩度の休憩を爲せしに關せず凱旋二十二露里を行きて最早進み得ず少佐は又馬を下り其口を取つて歩行をること十三露里、八時過ぎてボルヂノと名る小村に

到着し郡長の宅に宿れり

翌日に至りて憐びべし凱旋は一歩も動くてと能はず且つ食欲も絶えて横臥し左なから死に瀕しあるが如し僻地の寒村にて獸醫のあるべきにあらねば人を雇ふて四十五露里のヴラジミル市に走らせ獸醫の來診を乞ひしに道遠く且つ管轄以外なりとて辭して來らず止むと得ず深夜更に電報を發して三十五露里パクロフ市の獸醫を乞へり十二日午後獸醫一名警部と同車去來り詳細よ凱旋を診察して曰く病症は急性痙攣質斯にして到底二週日間は一歩も動くと能はず且つ歩行し得るに至りても尚ほ爾後容易に乘用に堪ふ可らず況んや一萬三千四百餘露里れ長程をや思ひも寄らずと少佐固より永く之を待ち得べきに非ざれば涙と呑んで斷然決心し他に强健にして高原寒暑の兩極に堪けるの良馬を得んと欲

し之をニシユニーノヴゴールドに求めんとせしかも該地は開市の時に非ず且つ哥薩克聯隊の駐屯なきを以て良馬を得ると難ければ寧ろ摩斯科に到るに若かずと聞き直ちに摩斯科駐屯頓哥薩克第一聯隊長に電報を發し適當の良馬ありや否やを問ひしに翌十三日返電あり曰く馬あり來るべしと依て即夜一時三十分發の汽車にてボルヂノと發し十四日朝七時摩斯科に着せり窓外の街道樹林茅屋は總て記臆に存ド揚々凱旋に輒ち過ぎしを想ひ起しては流石の丈夫も坐ろに物れ哀れに堪へざりしかり

兵營に到れば聯隊長大佐先づ食事に誘ひ兼て撰定せし馬を示せり少佐曰く足下若し余の目的に堪ふると信ぜば請ふ直ちに之を取らん隊長曰く强健の良馬なり能く西比利亞の往復に堪ふべきと先づ一兵卒を去て試乘せしむ少佐之を試みて曰く可なり隊長曰く七才頓哥薩克產れ駿馬なり價は廉あらず三百五十魯布を要す如何と少佐曰く諾、其夜大佐の宅に宿す翌十五日日曜にて銀行休業なるより十六日銀行の開くを待て金を受取り大佐に三百五十圓を渡して停車場に赴き午後一時馬と共に汽車にて發程し七時以前ボルヂノに着けり

十七日ボルヂノに在て新馬を試みあり並足乃快速なること意外にして一時間に八露里を歩めり少佐は之に命名して烏拉と云ふ舊馬に關しては頻りに賣却を望む者多かりしも悉く之を辭し數日間旅宿と爲したる郡長に贈れり憐びべし凱旋は十八日に至りても尙ほ歩行すること難く少佐は何回となく至り見る毎に喜色少佐を仰ぎ見て恰も訴ふる所あらんとするが如し少佐は胸塞りて涙堰き敢へず

五月十八日午後一時三十分始めて征馬烏拉に跨つてボルチノを發し九時ヴラジミルに着せり暑氣二十度なり烏拉い斯くの如き旅行の爲めよ訓練せし馬にあらざるを以て殊に注意を加へ距離僅に四十露里なるにも拘はらず途中二回の休憩を爲し且つ七露里毎に一露里と歩行せり郡長並に巡査一名全路同行しヴラジミルよりは貴婦人好奇者等數里の外に來り迎へ中には酒肴を携へて途に少佐を饗するあり到り着けば特に旅館の準備と爲し烏拉を消防隊の廐舎に入れ萬事懇切と極めたり少佐が不幸に際しての擧措沈着にして其宜しきを得たりとの評番高く大よ敬意を表して遇せり翌日は烏拉の爲めに此地滞在し、附添へられたる副官と共に中學校、女子中學校、兵營、消防隊等を見、午餐晩餐とも倶樂部に士官の饗應を受けたり此市人口大約一萬八千、丘陵に連りて風光頗

る美なり

二十日午前八時發正午羅氏の二十二度、道路緑蔭なく雲なく風なく去て驅行の不便嚴寒の時に劣らず中途烏拉れ爲めに二時三十分間の休息を爲し且つ一時間毎に一二露里下馬して歩み最も馬の健康に注意せり摩斯科にて毛皮の外套を脱し春着れもれを用ひしが忽ち夏と化したる爲め既に外套の重きを感ず流汗全身を洗へり此日行程四十四露里一小寒村に宿せりドロヅドバと云ふ椅子なく寢臺なく又麺包と鶏卵の外に食物なし

二十一日にも半途に二時半を憩ふて四十露里と行き二十二日は二十一露里にしてヴィヤッニキと云へる小市に着き一泊して馬を休め又二日間麺包と鶏卵のみに苦みたる胃を慰したり

五月十八日午後一時三十分始めて征馬烏拉に跨つてポルヂノを發し九時ヴラジミルに着せり暑氣二十度なり烏拉い斯くの如き旅行の爲め訓練せし馬にあらざるを以て殊に注意を加へ距離僅に四十露里なるにも拘はらず途中二回の休憩を爲し且つ七露里毎に一露里と歩行せり郡長並に巡査一名全路同行し、ヴラジミルよりは貴婦人好奇者等數里の外に來り迎へ中には酒肴を携へて途に少佐を饗するあり到り着けば特に旅館の準備と爲し烏拉を消防隊の廐舎に入れ萬事懇切と極めたり少佐が不幸に際しての擧措沈着にして其宜しきを得たりとの評番高く大よ敬意を表して遇せり翌日は烏拉の爲めに此地滞在し、附添へられたる副官と共に中學校、女子中學校、兵營、消防隊等を見、午餐晩餐とも倶樂部に士官の饗應を受けたり此市人口大約一萬八千、丘陵に連りて風光頗

る美なり

二十日午前八時發正午羅氏の二十二度、道路綠蔭なく雲なく風なく去て驅行の不便嚴寒の時に劣らず中途烏拉に爲めに二時三十分間の休息を爲し且つ一時間毎に一二露里下馬して歩み最も馬の健康に注意せり摩斯科にて毛皮の外套を脱して春着れもれを用ひしが忽ち夏と化したる爲め既に外套の重きを感ト流汗全身を洗へり此日行程四十四露里一小寒村に宿せりドロヅドバと云ふ椅子なく寢蓙なく又麺包と鷄卵の外に食物なし

二十一日にも半途に二時半を憩ふて四十露里を行き二十二日は二十一露里にしてヴィヤッニキと云へる小市に着き一泊して馬を休め又二日間麺包と鷄卵のみに苦みたる胃を慰したり

二十五日ウオルガ河岸に達し渡船にて河を渡りニジユニー
ノヴゴード市に入りて準備の旅宿に投せり近來常に地方政
府より一名の警官を附し頗る丁寧にするを以て運達旅宿を
得るに困む樣のことあし滞在四日にして二十九日ニジユニ
ーノヴゴードを起程し中途一回一時三十分間休憩して午後
一時半宿泊地チヤヌハに着せり行程四十二露里道路はヴオ
ルガ河右岸の高地に連り左岸一望地平線に達して眺望絶佳
なりニジユニー以東は築堆道に非ずと雖も道幅大約五十二
米突ありて中央車道と四十米突とす兩傍並木あり又石礫あ
き爲め雨天の困難思ひ遣るべきと雖も連日の好天氣にて馬
蹄の爲め頗る便を得たり村内の郵便局に投ドたれども矢張
鷄卵と麵包の外に食物なく又破れソファーの外に寢具なし
去れど饑て粗食なく疲をて寢具を要せず外套を纏ふて華胥

に遊べり
三十日は六十一露里にしてリユスコヴヲ村に宿り三十一日
は僅に十六露里にして路傍の一軒屋の立場に一泊せり
六月一日は五十一露里を騎してワシルスルスクと名くるヴ
オルガ、スラ二流會合の左岸に位する一小市に宿り翌日は馬
の疲勞を醫する爲めに滞在し三日四十八露里を驅つて一寒
村に達し郵便局に宿り巡査の補助に依りて僅に一羽の鷄を
得家主よ料理を賴みたれども夜乃十時に至りて尚は未だ膳
に上らず
道路好良に天氣は晴をて涼しく騎行頗る爽快なりしも茲に
最も少佐ゞ不愉快を感じたるは少佐の新馬にして常に氣甚
だ猛かりしが此日は殊に甚しく馬に逢ふ毎に飛び掛らんと
し且つ兩度迄不意に同行警吏れ馬に嚙み付きたり幸に傷者

ざりしも爲めに自ら一本の前齒を折れり又此馬は氣猛くして食欲少く其他種々の好まからざる欠點あるを以て到底少佐の目的に適せず夏季戈壁の大沙漠を跋渉せんとするが如きは思ひも寄らず不日更に他馬を求むるに急務を見るに至るべし少佐は此事と報じたる末に記して曰く「馬弱くして道捗取らず行途遠くして旅費溝く萬艱盤み至りて身に逼らんとす腦力を練磨するには此上なき好機會の一と銳意目的に從事し神州の名譽と共に斃れて後に止まんとするの覺悟なり

四日は五十露里にしてチエボクサル市、五日四十七露里アツコシノ村、六日十九露里リノヴカ村、七日四十二露里スヴィヤシエスク村、八日三十八露里を行いて加森府に達せりニシユニ、ノヴゴードより四百十五露里とす

少佐は其後カサンを發してより晝眠夜行暑を避けて十五日間(内二日滯在)に五百七十九露里半即ち六百十八吉羅を騎行して六月二十八日トルムに着すれば此地駐屯れ將校、樂隊を帥ゐ君が代の唱歌を奏して少佐を市頭に迎へ市外三里の野に誘へり此地に滯在そること三日即ち七月二日を以て再び發足しエカテルバルグに向へり此間の距離三百六十五露里にして少佐は出發の第二日目の夜はキンガー市に一泊せしが同市の豪商は少佐を招待して肉食乃饗應を爲し欵待の意を表せり彼のカサン、トルム間は實に記すべきこと多かりしも何分時を得ざる爲め報道の暇なかりし

トルムよりエカテルバルグ間は三百六十五露里半即ち三百八十九吉羅にして名高き烏拉の山中なりとはいへ共山の頂上海面を拔くこと五六千尺に上らず且つ地勢漸く上りて高

峰峻嶺乃雲際に聳ゆるも乃なきを以て之れぞ歐亞兩洲を分界する有名の烏拉山脈なりとは誰しも覺へず唯だ一片の石碑ありて是より東は亞細亞西は歐羅巴と刻めるを見て始めてろの然るを知るのみ山の傾斜は前に述ぶるが如く頗ぶる緩慢にして恰も高原と等しく車馬の往來甚だ便利なれども少佐が經過の折は極暑の最中に當りて氣候甚だ惡しく松杉雜樹の鬱林を貫ぬける道路を通行する時は屢々蜂群人馬を襲ひ馬に疲勞を來すこと亦尠からざるを以て騎行意の如く迅速なるを得ずエカテルバルグに至るまで八日間を費やせり左れば一日平均四十八吉羅強の騎行にして此間に少佐が安眠せしは僅に二回にして其他は晝夜とも僅に眠らんとすれば忽ち無數の臭蟲即ち(床蟲)に襲われて熟睡するを得ず或る夜の如きは不潔れ床板上に秣、青草などを敷き其上に一枚

の布團を宿の主人より借り受け漸く眠に就うんとすれば例の床蟲のみならず種々の臭蟲身體の四邊に襲ひ來り之を防禦する間に遂に一夜を明し尚は此八日間に肉食せしこと二回、雞を得て肉汁と製せしこと二回の外は朝夕凡て鷄卵を麵包のみにて極めて不規則の食事を爲すのみ然かのみならず地勢急峻ならざるも既に五六千尺の高き山間のまとして暑氣の甚だしき折柄雷雨連りに至り雨水屢々少佐の外套軍服を透して全身を濕ほすことあるも固と是れ着替と携帶する如き意氣の旅行にあらざれば濡るも其儘にして唯だ體温と云ふ天然の煖殖に依頼して乾かすの外なし其困難思ふべきなり左りながら少佐の鐵骨は一日の病ひをも釀すことなく蒙古の砂漠、西比利亞の氷雪も何の厭ふ所ぞ、敢て少佐の意とする所に非ざるなり唯だ茲に少佐の顧慮する所は十月以

前に蒙古の旅行を爲し了るや否や乃一事にして若し此原野一たび降雪に遇はゞ車馬の轍路忽ち消滅して一面れ銀世界を現出し或は其目的を達する能はざるの不幸に遭遇するも知るべからざれば少佐は是非十月までにッルガに出でんとの意氣込なるも時日を算すれば僅に七十五日を餘すのみにして里程は尚ほ五千餘吉羅あり故に滞在日數を除けば一日平均七八十吉羅を騎らざる可らざるを以て少佐の乘馬烏拉は充分に此目的を達するに適せざるのみか蒙古地方燕麥草秣なき乃高山に耐る見込なきを以て少佐はオムスクに達する前此困難に耐ゆべき馬二頭を買入るゝことに決せり

七月十五日少佐はエカテルムバルグを發しチユーメンオムクスに向ひしに十七日に至り百三十露里を騎りてカムシユロッフと云へる小市街に到着せり、此間地勢平坦道路善良に

して藪林耕田相交はり馬蜂少なく騎行に便なりし然れども路傍蔭なく日中暑氣甚だし經過する所の村落は相變ら玄鷄卵、麵包の外一物もなく又床蟲の來襲頻りにして安眠の出來ざること前の如し

八月三十日には賽密坡拉丁斯克に到着し九月五日發程二百一露里を四日に騎りて八日にはウストカメノゴルスッに達したり、其當時西比利亞の暑氣は想像の及ばざる所にして午前九時頃にて既に八十五度を示し午後一二時の頃にハ九十五度以上に至りしと展ばなるより日中の騎行は馬の疲勞も甚しくして行途捗取るべからずとて少佐は常に夜行を爲したり夜行に關しては記事多き雖も片紙の盡す所にあらねば先づ其一斑を擧ぐべしとて少佐は其筋の人に向けて左の日記を送れりと

夜行　八月三日午後六時三十分發程し虎病猖獗を極むるの村落に達して暫く馬を休め余も亦茶を喫し麵麭を食し十一時又發程せり時頗る暗黑よして僅に星の光りに由りてティシム河の橋を渡る右岸の道路宜しからず堅泥凹凸騎行頗る不便加るに天地寂寥唯だ微風の矮樹を動かすと蟲聲の唧々たるを聞くのみ此時案内者ありしと雖ども固より少膽漸く隨從すること二三里にして脫走せり、又地圖の記憶に由ると道路は南に走るべきを北極星より之を見れば常に直東に向へり、抑も此村落は俄幕斯克と多木斯克の道路相會する地なるを以て或は德波利斯克の道路にては無きやの疑念を生せり、然るに地圖を檢せんとする燈火なく電線に便らんとするも深更之を妨げ疑團の間に馬を進むること里餘漸くよして電信社の下に達するあとを得、社

上四線を架するを見て始めて誤りなきを信じ鞭聲肅々馬と馳り六里餘にして一坂に達せり、坂下馬頻りに嘶く而して坂上に達すれば一驛車の行くあり車夫は止まりて短銃の用意を爲し居れり余は微笑して過ぐ是れ蓋し余の乘馬寂々寥々の際、遠く輪聲馬蹄の響きを聞き喜びに堪へずして大に嘶きたるを車夫は時ならぬ深夜に馬の嘶くを聞き只事ならずと車を止めて防禦の準備を爲せしなるべし夫より道路良好騎行甚だ便なり然れども數里間を行くも一人家あく行人全く絶え天地寶よ我が獨有たり

虎烈剌　波耳斯に流行せし虎烈剌病裏海を越て露國に入り盛んに西比利亞の西部を襲へり余虎烈剌病の流行地を通過することと日本の里程にして大約四百里、或は虎病ある家に宿し或は路上感染せし患者に投藥せしなど常に虎

病に接せり又市街を除くの外驛舍村落には絶て醫師藥鋪なく其村落も數十里を隔てゝ點在する程なれば警察の注意亦普からず人民は恐るべきの傳染病たるを知るも之を豫防する乃途を知らず病勢思ひのまゝに猖獗を極めたり此間に在て余が衛生豫防に手を盡そこと能はずして而して此傳染を受けざりしは實に此上もなき幸福と云ふべし」

接待　到る所軍人の榮譽を以て接待せらるゝを常とす

旅費缺乏　旅中不時乃困難及び出來事あるを以て費途從て多く窖密坡拉丁斯克に達せし時は僅に五百ルーブル（日本銀貨二百圓許）となれり然るに蒙古を跋渉して西比利亞の境に達するよは尚ほ日本里程八百餘里あり嚴冬目前に迫れるを以て衣帽其他防寒の準備を爲さゝる可らず又無人の沙漠を經過するには之に堪ふべき强健の二馬を購求せ

ざるべからず實に旅費盡んとして道遠く萬艱頻りに迫らんとするの秋に際し浦潮斯德の領事より電報あり旅費を既に義再古德斯克總督の許に送れりと實に再生乃思ひを爲し早速電報を以て七百ルーブルを請取りこれにて十分の準備を爲さ更に斂眉の勇氣を以て蒙古に向はんとす

窖密坡拉丁斯克より發程して亞爾泰山のウラ谷を進路越に懸るべし此時れ即ち西比利亞と蒙古の境にして高さ九千二百八十尺、蒙古よりは科布多、烏里雅蘇臺、庫倫に經賣買城より西比利亞に出づべき計畫なり此距離大約日本里程八百里なるを以て別段出來事なければ十一月中旬を以て西比利亞の境に達すべき積なり

九月二十三日少佐は亞爾泰山の烏闌達巴領を越えて外蒙古に入り科布多及び烏里雅蘇台に各々二日の滯在を爲し大約

我が四百四十三里を四十六日間に騎行し十一月十一日無事に庫倫に到着せり、却説蒙古地方乃跋渉は露國産の馬四頭(乘馬二頭、駄馬二頭)にして騎馬には豫備飼料の燕麥を駄し俱に撰定せし屈強乃駿馬なりしが道路氣候水草の困難に依りて非常の疲勞を來し一馬は纔に烏里雅蘇台に達するを得、一馬は遂に途に斃れ二馬のみ壯健にて當地に到着するを得ると能はず時としては露天に一夜を明さんとし其困難少なからざりしが露國人れ懇切なる周旋に依りて科布多及び烏里雅蘇台の將軍參贊大臣は毎台一二の人夫を出して駄馬を曳き道路を示めそしむるに至れり、前後蒙古土人の張幕内に投宿すること四十六日にして其間騎行困難實に筆紙に尽し難し

少佐は十二月九日無事にイルクツクに着したり

福島少佐は昨年二月十一日伯林を發し豫定の順路を經て遲くも同年九月上旬には歸朝するの豫定なりしも途中騎馬の疾病等は爲め意定外の日子を費し漸く昨年十二月十四日露國のイルコオツクに到着したる旨仝月十八日陸軍參謀本部へ電報ありし由なるが少佐は同日より同地に二周間滯留の後彼の賣買城へ向け出發し本年三月中旬を期して本邦へ歸朝する筈なりと云ふ

以上記する所は福島少佐が伯林發途以來、時々陸軍參謀本部又は知己等の許へ贈りし所の大略の紀行と拾集せしものにして未だ其詳細を知るに由なけれども姑く茲に記載して看客諸彦の一粲に供す尚は少佐が首尾よく歸朝した る上は再び福島少佐遠征騎行の後編として發刊する所あるべし

福島少佐騎馬旅行終

福島少佐紀行餘聞

福島少佐の騎馬西伯利亞遠征の事は夙に本邦に喧傳し全國の各新聞紙は皆其雄志を稱揚す然れども其報道や斷篇片文にして未だ其前後の關係を詳かにせず今や露國人ヴイ、グリバエドッフ氏が「シカゴ、デーリー、ニュース」に報道せし者を見るに其記する所或は誤謬なきにあらざるも事頗る新奇殆んど一部の小説を讀むの想あり、ヴイ、グリバエド、ッフ氏の筆に依り福島少佐の名益々顯はれん、即ち左に其全文を譯載せん

獨逸伯林府の日本公使館付武官福島少佐は獨逸首府より清國上海まで陸上長途れ騎馬行を試むるあとに決し、本年一月下旬此の遠征の途に上る此間の距離實に一萬キロメートルに亘れり。此驚くべきの騎馬行は中途に於て馬を易

へ丈、徹頭徹尾、一馬を以て其目的を達せんと期するに在り故に愈々此行を全うせたる上は、騎者と其名譽を此馬と共に頒たざるべからず。此行は發途の日より七ヶ月以内に終る豫定にして、歐洲の諸新聞紙皆此行に多少の注意と喚起せり、然れども其行の感慨あるこゝとは未だ一般に承諾せらるさる所たり。福島少佐は身長高からずと雖も、体格能く稱し、純乎たる日本人の標本なりとす、年未だ三十(編者云ふ少佐は三十五六歳なり)を過ざれども、已に歩兵少佐の列に加はる、是れ同少佐の聰明にして且つ軍人たる資格に長する所ろあるに依る。氏や累進して現官に上り、且つ在伯林乃日本公使館付武官に任ずるの榮譽を得たるも全く之を爲めのみ。此勇敢にして且つ大志ある少佐は已に其行れ三分一を終り、毎日平均の行程は六十二キロメートルに及べり、

而して今や露國及西伯利亞間の境界に達したり。聞く福島少佐は名家に生れ有名なる長州藩閥の子孫なり、(編者云、氏は舊信州松本藩士なり)而して今回少佐が此行を起すに決したるゝ全く一時の虚想に發し、日本政府の補助を得て茲に至りたる者なりとの説が今日に至るまで一般に行はるゝが如し、然れども其實然らず、此行實に一婦人の愛に基けるもの、而かも其婦人は絶世の美人なり。福島少佐は頗る交際社會に出入するこを好み伯林都門の豪遊に慣熟し昨冬中宮廷の踏舞會を始めとし、苟くも交際季節に行はるゝ宴會にと必ず出席せざるなかりき、其人と爲り快活にして温雅愛すべきを以て、交際社會に人望甚だ高く、此交遊中に於て普露西の名將フォンボッドビルスキー氏の令妹と相知れり。此貴嬢は絶世の佳人にして伯林交際社會に稱せられ

しものなれば、少佐は一見、眷戀措く能はず、終始眼眸を此貴嬢に注射して餘念あらざる姿は忽ち傍人の眼に觸れたるより、甲傳へ乙和して未だ幾何ならざるに、此風説交際社會中の一談柄となり同少佐は何故に我交際社會女王中の絶美人を懸想するに至りしやと口耳相屬し、貴婦人等は扇面乃上に微笑を含み、縉士等は少佐の後背に立ちて冷笑せり。此の如くして數月を經過しポッドビルスキー嬢の一家は少佐が同嬢に意あるとを悅ばず、同嬢も亦躊躇するの色あり、而して同嬢の舍兄ハ俾斯麥公爵が編成せし有名なる聯隊付の武官なれば、福島少佐が其令妹に愛を求むる乃情あるとを見て寧ろ憤怒するの狀あり。然れども此日本人が公然求婚の儀を提出するまでは固より斷乎たる處分に出づる能はざるを舍兄の心中には唯だ怨み居たりける。

福島少佐か懸想せし美人は舍兄ポドブリスキー氏は令妹の爲めに少佐を遠けんとを謀り、即ち同僚の士官等を語らひて、一夜伯林の某倶樂部に遊び、豫て打合せし所に依り、少佐にシャムパン酒を甚だ勸めて大醉せしめ、且つ少佐を窘め辱れんと相談一決したり。偖少佐は歩兵士官なりと雖も、平素人に語るは騎馬の達人と云ふに在り。少佐は追々酒の廻るに從ひ、騎馬は自負を始め出せしに、元來獨逸人は日本の武人を以て騎馬に慣れざと爲し、頗る之を輕蔑し居れば、少佐が眞正なる騎馬の達人たるとを信ぜざりしが斯る間に少佐は醉に乘じて謂へる樣我れ能く伯林より上海まで馬と易へずして陸上の旅行を七ヶ月間以内に仕遂ぐべしと。其場に居合はせし獨逸の軍人等は少佐の談を面白き事に思ひしも、始めの程は眞面目の言にあらずと爲せしに少

佐は醉の廻はるに從ひ斷乎として此事を云ひ張り、吃度此行を仕遂げて見すべしと自負措かざるより、茲に初めて獨逸の軍人等は少佐の言が一時の戯にあらざるを承認し、且一つ少佐にして愈々此行を仕遂ぐるならば賭するも妨げなしとて、遂に之れに一万マルクの金願と賭する事となりぬ。若し此行にして果して獨逸人に依り發意されたるとならんには獨逸の軍人等は能く二千マルク以上の金額を賭するの膽氣あかるべきも、此行を爲す者が日本人なるより輕侮して彼等は輒ち一萬マルクと打て出でし次第なれ。己にして少佐は其醉の醒めし時、始めて愚なる事を言ひ出しけりと思ひけれども、少佐固より武健敢爲の性あり、一たび言ひ出せしとは斷乎として復あ跡に引くの人物にあらず、然をば此處に少佐は彼の日本男兒が從容として自裁に

臨むの高貴なる精神を發揮し斷然曩の己れを侮蔑せし者共を驚服する所あらんと自決し、茲に愈々長途の騎馬行に上る事となりぬ。少佐は此行に用ふる駿馬を撰擇するに際し、英國上等種の十歳馬を特に伯林府内にて買求めたり、行李已に整ふに臨みて、少佐は軍服を纏ひ、此駿馬に跨り愈々出發しあるに、其服裝は恰も佛國の騎砲兵士官に類しあり。少佐は下襦袢の着換の外、佩刀及び二箇の短銃を携へ、彈藥の準備を十分に爲し置きたれば、之が爲に尠少ならざる金願を費せしと知るべきなり。此行や露國を經過去たる上、西伯利亞を横斷し、轉じて清國上海に出づるに在り。少佐が此行に付き獨逸軍人と賭せしは昨年十二月の事なりしに此行は本年一月下旬に起り七月に至りて露國を通過し、已に西伯利亞の境界線に達したり。少佐が獨逸の國土と離

れ、初めて露國の地を踏しはクトノウ府に在り、即ち同地に駐在する露國の射撃第四聯隊付士官等は特に少佐の膽氣を稱揚したりしとぞ。ヴィルナ府に於ても均しく軍人の喝采を博し、同地以外は道路非常に悪しく、且つ時恰も嚴冬に際し、大雪氷塊の爲めに道を妨げられて、實に行路難を極めあり。少佐はヴィルナ府を距る十二哩の地に於て危險なる經驗に遭遇せり、即ち鬱蒼たる松林を通過する際日已に暮れて、途遠く、闇黒咫尺を辨せざりし際、少佐は尚も馬を急がし、て進行せるに、午前一二時の頃に至り松樹の蔭より一點の火光と認めければ、少佐之以爲へらく是れ一体の樵夫が林中に日を暮したるより松火を點じて煖を取り居る者と、而して焉んぞ知らんや此等の人物正に是を強賊なりしとを」福島少佐は林中の松火に疑ひを抱きつ馬を前めけるに、忽

ちにして一路幅狹き處の兩側を蔽へる深林の間中より數名の曲者飛び出で、内一人は矢庭に馬の口を取り、他の數名も騎者を執へ強て鞍上より引摺り卸さんと務めぬ。此時少佐は實際に其馬の慧敏なりしが爲め自ら救ふを得たり、即ち馬は咄嗟の間に舊然として後脚にて躍り上り、曲者として爲す所を知らざらしめ、且つ數名を手きびしく蹴飛ばしたり、此際少佐は拳銃を擬して自ら防ぎ、馬に一活を入れて急に鞭を加へ、一氣呵成に疾く驅り去れり。已に去て少佐は僅かに次きの宿驛なるヤルナックに達せし時、林中にて我が出逢ひたる曲者は有名なる一組の強賊にして、現に二週間前も此強賊は逃捕に向ひし憲兵二名を殺害し、露國政府は若し之を縛し來るものあらば、其賞與として巨額を與ふべしと告諭し居ると聞けり。少佐がヤルナックス府に達

せし時、同地の人民は少佐の冒險談を聞きて、初めの程と容易に之を信ずるの色なかりしも、愈々實説なるを知るに及びて、皆少佐及び其名馬の勇を頻りに稱えて止まず、且つ幸よ殺戮を免れしことを少佐の爲に頗る祝しよりとぞ。已にして此冒險騎者が露都聖彼得堡府に達するに及び、同地人民は皆之を歡迎し、露國皇帝は特に謁見を賜ひ、少佐召に應じて宮中に伺候せし時、皇帝は親しく少佐の勇膽忍耐を稱揚し玉ひたる由にて、近衛隊士官等は之を遇するに貴賓の禮を以てし、一般の社會亦其厚遇に扶くる所あり、福島少佐の名は一時露都に喧傳せり。莫斯科府に於ても少佐又非常の歡迎を受け、同地市會い特に少佐の名譽を表し、其他市民一般に待遇至らざる所なかりき。然れども今や少佐の馬は長途疲勞の結果として、漸く病兆を現ず、遂に騎馬行の用を辨

ずる能はざるに至りしかば、此一事は少佐の憂慮を增し、口さがなき都人は之を以て却て少佐と嘲笑するの材料に供し、少佐は馬を見るの明なしとし、果ては少佐が伯林にて一杯喰せ物を買はせられたる者にて、伯林の馬商は駑馬を巧みに賣り付けたるに相違なしとの風説さへ起るに至りたりき。然れども六日間療養を加へたる後、馬は健康を回復し得たれば、少佐は乃ち躊躇せず、再び騎馬行を始めたり。少佐は爾來三十日間以内を期して西伯利亞の首都トボルスクに達し、夫よりイルクツクに到り、夫よりバイカル州を横斷して滿洲に渡り、夫より清國北京に直行して、北京よりは天津に出でゝ蒸船に搭じ上海に到るべき計畫なりと。少佐果して首尾能く其目的の地に達するを得ば、全世界に名譽を表すると疑を容れず、且つ其外にも伯林の佳人に

對する屬望は之が爲めに必然增加するとを得べき。少佐能く其業に於て功を奏すべきか、少佐果して美人ボッドビスキー孃を得べきか、望むらくは少佐之を得るあらんとを、只管少佐の速達を祈る。

福島少佐へ金二千圓を賜ふ。

敬聖文武なる我が天皇陛下には恐れ多くも常に朝野諸々の事に大御心を注がせ給ふ御事は今更申すまでもなき事ながら何時しか西比利亞地方を單騎旅行せる福島少佐の世にも勇しき擧動と聞召し給ひ其雄壯なる志圖を深く感歎あらせられて頃日の事とか思召を以て御手許金の中より金二千圓を下し賜ふ旨仰出されたるに依り在東京同少佐乃夫人は良人に代りて恩賜金を拜戴したる趣きなるが少佐にして旅行中此嘉報に接しあば其喜び果して如何ぞや定めて天恩れ厚きに感じ健全當初の目的

を達し歸朝の上は天顏に咫尺して今日の聖恩を拜謝し奉るは蓋し近日の內にあらん

福島少佐に對する義擧　騎馬旅行を以て有名なる福島少佐の遠征の勞を慰せん爲め在東京の樞密顧問官河村純義伯、同井上毅、貴族院議員渡邊驥子、司法次官清浦奎吾、貴族院議員長岡護美等の諸氏が發起となり、昨二十五年十二月七日東京上野なる華族會館に會合して大いに義捐金募集の件に付協議を爲したるが右の諸氏は同少佐歸朝の上は一大歡迎の宴を催ふさんとて昨今夫々歡迎委員を撰定して專ぱら其準備に奔走中なりと云ふ

福島少佐の略歷　騎馬旅行者福島少佐は信州松本の出身にして兼て外國語に通ずるの故を以て明治七年陸軍文官となり、同九年米國費府博覽會に派遣せられ、同十年西南の役に從

軍し、同十一年陸軍歩兵中尉に轉じ、同十五年朝鮮國に出張し、同十六年清國公使館附武官となり、同十八年伊藤博文伯に隨行して再び同國に赴き、同十九年印度地方に出張し歸朝の後印度紀行を著し、同二十年獨逸國公使館附武官に轉じ同二十四年末迄同館に在勤せり、氏は本年四十歳なり、

福島少佐昇進の風説　單騎歐州大陸を横斷して茫々際を知らざる西比利亞不毛の内地に入りたる福島少佐は新年早々中佐に昇進さるべしと風説子は傳へり

獨逸新聞紙の虚報　福島少佐が露國彼得堡に滯留中、獨逸の新聞紙い種々なる虚報を記載して同少佐の名譽を傷けんとせし事なるが今其一二を左に譯出して看讀諸彦に供すべし」

日本の少佐福島安正氏は今度彼の萬里騎行の大膽なる計畫を廢止したるが如し、少佐は三月(二十五年)十八日ピッ

プスク州のアントノーベルに着したるとき人に語りし所に據れば騎馬にては先づ彼得堡迄行くのみの目算にして假令ひ能く繼續し得るも摩斯科を限りとすべし、而して摩斯科以東は滊車の便を借りてニシニ、ノーゴロード加森、土摩斯科を過ぎ浦拉斯德に至りて便船を以て東京に航すべしと云ふ、蓋し少佐は既に其壯圖に疲れ且つ全く其旅行に退屈したるもの、由云々

伯林に居れる少佐の友人某はヨモヤト思ひしのど心に懸り て此の趣を少佐に通じ其事實を照會せり、然るに少佐は露都に在りて其新聞紙を見て大いに其虚報を驚き直ちに書を裁して其友人に送りたり、曰く

何者の惡戯か固より取るに足らずと雖も小生と知らざる者は或は之の事を信じて談次、兄等に問ふものあらん、然

らば請ふ答へられよ

事、大小となく一度決心せし上は水火と雖とも決して避けざるが大日本帝國軍人の本色なり、安正亦日本の一軍人たり、故に安正の遠征は關し他日世人は二者の一を聞くべし曰く、成功或は死

福島少佐遠征の行程

陸軍參謀本部詰の某武官は此程福島少佐遠征の行程を取調べしに其豫定の路線に因るときは獨逸伯林より露國浦盤斯德までの里程は三千八百八十餘里にして一日の行程十里平均とすれば三百八十八日餘と費し其内種々の事故よて同一の場所に滯在することもあれば全く遠征を終る迄には四百餘日を費すならん、而して少佐が獨逸伯林府を發し遠征の途に上りしは昨年二月十一日にあれば少佐が無事遠征を終り浦盤斯德に着そるは本年四月の下旬

ならんと、姑く看人の參考までに掲げ置きぬ、

福島少佐の夫人

騎馬旅行を以て名を天下に轟したる陸軍歩兵少佐福島安正氏の夫人は四五年前、良人が獨逸伯林へ赴任せられし當時、既に懐姙りて居けるが月滿ちて分娩したるは目元、口元良人に似て愛らしく之を別れる中の樂みとして養ひ育て居れる由あるか其折、分娩の事を良人の許へ報知たる筆の序にも良人の事は苟且にも忘ることなく何卒期滿ちたる曉には無事に御歸朝の程、今より神佛に念じて片時も忘る暇はなく早く此兒の顔をお目に懸け共に御喜悦申した

夫れに就ても小兒一人にても多くありては兼て毎月お仕送りの御手當にては何分にも事足らねど、此上御心配かけさせまそるは心苦しければ其代りに下婢一人の口を減して家の入費を補ひ水仕、裁縫の業さへ自から手を下して居ります

るゆゑ御心配下されまゝく候と我身を忘れて一意良人と家を憶ふの志には見聞く人々さへ執れも感涙に咽ばぬものはなかりしとぞ、其後數年の間、一日片時も渝ることなく孤しき閨を守りて貞操を持つこと常に良人の前にあるが如く只管良人の上に恙なきことゝ我兒の成人とを祈り居たるに今度いよ〳〵歸朝せらるゝと聞き飛び立つばかりに嬉しけれど日頃進取の氣象に富める良人のことゝて漁船も漁車もある世界に冒險名譽の心より騎馬の旅行を企圖たりとの事に嬉しき中にも思ひは絶へず昨夕は何處の樹影に宿りて妻子の夢をひそび玉ひしや今日は如何なる險路と跋りて知らぬ山路に日を暮し玉ふやらん抔と寢ても寤めても物思ひの種は尽きず魂ひ良人の傍にありて其無事と守らんばかりの貞節に親族、故舊の心を憐まぬはなきと云ふ、世の輕薄にして浮

きたる心を持ち他人に後指をさゝるゝ婦人これを聞のば愧じて死するなるべき

福島少佐紀行餘聞終

版權登錄

版權所有

明治廿五年十二月三十日印刷
明治廿五年十二月三十一日出版

編輯兼發行者　名古屋市南外堀町十七番戸　佐野卯三郎

印刷者　名古屋市小田原町三拾二番戸　櫻井仙右衛門

發賣所　名古屋市本町六丁目　東雲堂
　　大坂東區南久寳寺町四丁目九十九番地　東雲堂
　　東京々橋區中橋和泉町四番地　東雲堂

任天居士○醉多道士、合著

小說文語繡錦

洋裝美成本全一冊
正價金二十錢
郵稅四錢○郵券代用一割增

本書は左の部門を記載す

小說文話 小說の目的●小說家の須要●小說の体裁●客觀体●敍事体●速記体●言文一致体●理想体●小說の人物●現今小說の難義●現今小說の容易●佛語●小說文字●符牒●符号

羈旅門 道中風光●辛苦●艱難●告別●寂寞●宿泊●風景●季節●飄泊●寂莫

遊覽門 景色●庭前景容●徒然●隱逸の情●眺望

快樂門 驕者●風雅●游逸●風光●殿舍の景容及び庭園●

悲哀門 生別離苦●懷舊嗟嘆●愁傷狼狽●慘怛呻吟●瀕死々苦●泪の種此に在り

貧苦門 渉命●究迫●零落●飢渴●生死別●流離轉沛●懷舊●

美人門 貴女●淑女●阿娘●游女●歌妓の景容及び態度經緯●

閨怨門 相夫憐●怨恨●追慕●貞操●破鏡●寡婦●孤女●纏綿の情

戀情門 戀慕●纏綿●貧綠●赤繩●長恨●錦字情●相思●花心鳥意●落花流水●

倫門 母子●父親●夫婦●離別●夢想●恩愛

滑稽門 諧謔●法螺●冗語●串戲●咄笑

舞樂門 管絃●舞踏●裝飾

慘狀門 苦痛●叫喚●殘酷●羽傷●爭鬪●悲鳴●

釋教門 教意●說佛●風光●菩提●有爲轉變●浮世夢幻●會者定離●臨終末期●悲風滲雨●鬼啾々

無常門 泡沫無常●人世夢の如し●寂滅●懷舊悲哀●政治●權門●舉動●物類●季候●吐語●憤怒●平常●通常景容

雜門 本項は俗語を唐山小說文字に充當せしめていろは分と爲す

俗語通譯

阪春莊先生編

生徒必携

記事文教科書

近世作文ノ著書頗ル多シ然レドモ皆論說對策序跋等初學ニ不急ノ者ヲ以テ卷中ノ七八ヲ塡メ最必要ナル記事文ニ至リテハ甚寡少ナリ今此書ハ數百章ノ記游文ノミヲ蒐メ春夏秋冬雜ノ五門ニ分チ篇頭ニハ親切ナル作文法數則ト適實ナル文語數千言ヲ加ヘテ編纂セシモノナレバ苟モ文學ニ從事スルモノヽ一日モ欠ク可カラサル古今獨步ノ法典ナリ宜ナル哉五柳先生ガ本書ニ序シテ下學ノ捷法誘蒙ノ善術ナリト稱賛セラレシハ誠ニ所以ナキニアラサルナリ諸士夫レ速ニ一本ヲ購讀シ縱橫物碍ノ文章家ト爲リ玉ハランコト切望ノ至リナリ

洋裝美本全一冊
紙數三百ページ餘
正價金二十錢
郵稅六錢●郵劵代用一割增

西村於兎編纂 教育脩身談

道德ヲ涵養シ智識ヲ開發セシムルハ蓋シ脩身家ノ力ニ勝ルモノ無カルベシ故ヲ以テ世上脩身ニ關スル書ヲ發刊スル者少ナカラズ然レドモ其高尙ニ偏セザレハ卑近ニ流レ兒童ノ誦讀ニ適スル者ハ極メテ稀ナリ今此書ハ西村於兎先生ガ多年ノ經驗ト敎育理法トニ基キ難易繁簡ヲ斟酌シ其宜キニ隨ヒ面白キ脩身談數百章ヲ編纂セラレタル者ナレバ一度此書ヲ繙ケバ其身ニ娛樂ノ趣味ヲ感シツヽ彼ノ道德ト智識ヲ涵養開發スルニ至ル稀代ノ敎育撥書ナリ世ノ父兄タル人ハ必ス一本ヲ其子弟ニ授ケ玉ヘ

洋裝美成本全一冊
紙數百五十餘ページ
正價金十二錢
郵稅四錢○郵劵代用拾三錢

測量精密 **帝國新地圖**

本圖ハ彫刻極メテ鮮明記事最モ精確ニシテ鐵道ノ如キモ新設ノ線路ヲ加入シ且府縣郡名表及海陸里程表山嶽河流比較表等ヲ附シタル新刊ノ好地圖ナリ

一枚摺
最上美製本
竪二尺六寸横三尺六寸
正價金十六錢
郵稅四錢○郵劵代用十七錢

新撰精密 **萬國新地圖**

世ニ萬國地圖夥多アリト雖モ本圖ノ如キ彫刻鮮明記事最モ精確ニシテ加フルニ全地球圖●各國都府一覽表●國旗一覽表●鐵道線路●高山比較表●各國面積人口一覽表●海上里程●大川比較表●沿海週廻里程等ヲ附記シタル最良ノ好地圖ハ未タ曾テアラサル處ナリ

一枚摺
最上美製本
竪二尺六寸横三尺六寸
正價金十六錢
郵稅四錢○郵劵代用拾七錢

四季類題 **發句壹萬集**

本書は滿月居士嫦娥大人の編にして各宗匠方の撰されしものを四季總雜の各部に分ち面白き餘興を添へたる俳道必携の珍本あり

洋裝美本全一冊
紙數二百二十ページ
正價金十錢
郵稅二錢○郵劵代用一割增

五柳散士著

豪傑奇譚

本書ハ古今内外諸豪傑ノ偉業奇事ヲ簡明正確ニ蒐集シタル者ナレバ一度巻ヲ繙ケバ愉快ノ念逐々トシテ心頭ニ生スベク間々又傑士ノ失錯ヲモ忌彈ナク叙述シタレバ抱腹絶倒スルコトモアルベシ要スルニ英雄豪傑ガ言行ノ寫眞ナリト云フモ敢テ誇言ニアラサルヘシ請フ諸士一本ヲ購求シテ其奇譚珍説ヲ知リ玉ヘ

洋装美成本全一册

正價金七錢

遠方ヨリ御注文ノ節ハ郵券十錢御送付相成候ハヽ郵税濟ニテ速ニ御送本可致候

古今傑作

淨瑠璃大全

本書目錄

●菅原傳授(寺子屋の段)
●日吉丸稚櫻(三の切)
●朝顔日記(宿屋の段)
●鎌倉三代記(三浦別れ)
●伽羅千代萩(御殿場の段)
●太功記(十段目)
●二十四孝(十種香の段)
●一ノ谷嫩軍記(熊谷陣屋)
●安達原袖萩祭文の段
●時雨の炬燵(紙屋の段)
●艶姿女舞衣(酒屋の段)
●攝州合法辻(下の巻)
●玉藻前旭袂(三段目)
●國性爺合戰(樓門の段)
●伊賀越(沼津の段)
●妹脊山婦女庭訓(四段目)
●關取千両幟(猪名川内段)
●箱根權現躄仇討(瀧の段)
●御所櫻(辨慶上使の段)
●卅三間堂(平太郎住家段)
●お駒才三(鈴ヶ森の段)
●道中膝栗毛(赤坂並木段)
●作替、寺子屋、二十五孝、太功記

洋装美麗本全一册

正價金十錢

紙數四百ページ餘

郵券代用郵税共十四錢

耕哉益田曆之助君編輯

農家必携

本書目錄(養蠶之部)○養蠶二法○特別飼育法○普通飼育簡易法○蠶種の撰び方○病蠶種の鑑定○蠶病の話し○秋蠶飼育の利害○繭鑑定法○蠶室に硫黄を燻するの利害○蠶種法問答○養蠶受扱法○養蠶中寒暑濕防法○蠶室内の火爐○仝法二○秋蠶飼育實驗法(米麥作改良之部)附綿麻藍及製紙材料藥劑類○米作改良法○稻作改良法○實時米作法○稻の撰種法雜説○關取栽培法○善光寺稻同○伊勢早稻同○八房稻同○六尺糯同○白米稻同○早稻「八八日」試作成蹟○中稻一本草試作成績○早高屋稻外五種試栽表○神力稻栽培法○「カロライナ」米試作成蹟○八德麥栽培法○粟の播種法○玉蜀黍播種法○玉蜀黍栽培法○秋蕎麥同○蕎麥同○馬鈴薯同○甘藷同○琥珀甘藷同○大麻名○草綿名○藍同○七島藺同○望江南栽培法附効用「アブシント」栽培法附効用○酸漿栽培法○ダルマシヤ除虫菊名○實芟太利斯同○加密列同○小茴香同○決明同○西洋蒿浦同○烟草同○菜種同(蔬菜類栽培法之部)附菽類栽培法○寶菜栽培法○赤菜同○白龍菜同○雪菜同○油菜同○蔓菜同○德菜名○壬生菜同○利久菜同○菠薐菜同○越瓜同○胡瓜同○南瓜同○西瓜同○甜瓜同○匏瓜同○糸瓜同○茄子同○蕃茄同○小田中茄子同○牛蒡同○夏大根同○時無大根同○藥取大根同○宮重大根同○桃山鼠大根同○三月大根同○麹不入大豆同○久助大豆同○木蓎大豆同○大川大豆同○江鑑豆同○白莢豆同○二本木豆同○大黑豆同○白豇豆同○三色小豆同○落花生同○刀豆同○大莢隱元豆同○生姜同附貯藏法○紫蘇栽培法○甘藍同○萵苣同○獨活同○里芋同○仝法○水款冬同○茗荷同○亞米利加ねり同○薤同○蒟蒻同○蓮同(菓樹及有用樹栽培法之部)夏橙栽培法○金柑樹同○林檎樹仕立方○桃樹栽培法○柿同○葡萄樹剪定法○栗樹栽培法○梅樹同○櫨苗成育の新法○漆樹栽培法○樗樹同○梳仕立方○

洋綴全壹册

紙數四百二十ページ

正價金三拾五錢

郵税六錢○郵券代用一割増

又◎竹林蕃殖法◎又◎杉同◎楮苗仕立方◎桐苗同◎罌子桐栽培法◎檜同◎三椏同（諸害蟲驅除法の部）附害剕害鳥獸驅除◎貯米の害蟲驅除法◎穀類鼠害豫防法◎穀類蠹害同◎米麥蟲害除法◎螟蟲圖解附驅除法◎苞虫驅除法◎飛蝗同◎桑蝦同◎麥奴豫防法◎蠹れ蟲害驅除法◎蚜虫驅除法◎蟻の豫防法◎蛇害豫防法◎馬鈴著害虫同◎牛虱驅除法◎肥料咀同◎土龍同◎黑椿象同◎葡萄害虫同◎梨樹黴菌同◎野鼠同◎貂の豫防法◎草綿ホロ豫防法◎象鼻虫驅除法◎貝殻虫豫防法◎燒酎粕を施して蚯蚓の生すこを防く法◎八目鰻を用て田圃れ虫を除く法◎茶の毛蟲驅除法◎杉菜を根絶する法◎鳥蔽根絶法◎栽栗根絶法◎地縛草同◎粟の梧穂及黑穂豫防法◎稻莖刺虫驅除法

（諸肥料製造法之部）附肥料貯方施用法◎肥料の貯へ方◎小蠶肥料製造法◎田螺肥料同◎堆肥料同◎過燐酸石炭製造法◎蠶蛹肥料同◎蠶糞施用法◎鰯屑肥料製造法◎游泥肥料同◎鷄牛馬肥料同◎骨粉同◎醬油肥料◎鷄糞肥料調製法◎鰯肥料用法◎毛髮肥料同◎灰の効用

（雜之部）◎馬鈴薯の花を摘去るへき事◎安全なる種子貯藏法◎水害地に栽植すへき作物◎新墾地の作物◎深田の改良法◎瘠土改良法◎全上附石灰施用の注意◎排水法◎叉◎廐改良法◎馬の飼料◎牛を購ふ注意◎牝牛を撰ふ法◎畜類に温水を飲ましむる効◎腐作り◎循環法◎肥料の試驗◎施瓜肥料◎甜瓜の潤肥料◎西瓜れ肥料◎蜜柑貯藏法◎柿實用◎馬鈴薯同◎肉類貯蓄良法◎炭粉の効能◎柿子の貯蓄法◎砂地に桑を植付る法◎柑橘煤病治法◎橘樹の衰弱を復す法◎澁柿を甘柿とする法◎柿苗の作り方◎植物根吹法◎苗木移植の注意◎桑株の取扱方◎桑樹保護法◎桑苗取扱◎桑苗植付法◎全植付後手入法◎全栽培者の注意◎桑樹の移植期節◎陰濕地に適する植物◎挿木の秘法◎桑苗挿木法◎接穂の撰擇法◎接穂伐採後の注意◎接穂貯藏法◎接穂期節◎接合の注意◎老樹接木法◎厚蕃厚植乃害及實驗法◎大小麥各種肥料の試驗◎全試驗表二◎肥料の比較◎桑肥料比較試驗表◎過燐酸石灰調和肥料試作並に表◎麵麥孤潤法の効益及其仕方◎藍作肥料試驗◎馬鈴薯と甘諸と作徳の比較◎紫雲英の効用◎小麥刈收跡の作物◎雞病治法◎雞脚病同◎雞外傷同◎雛雞下利病同◎雞痛風病同◎雞發疹同◎雛雞暖啾同◎家禽天然孵卵法◎雞卵の新古驗法◎同保存法◎馬の悪癖矯法◎病犬治法◎乳牛飼養者心得◎乳牛の必要なる飼料の最も良乳汁を得る法◎菓實堅落を防◎菓實貯蓄法◎此他諸種子の撰擇並保存法及農家必要の諸法夥多にして是に揭げ盡し難し

小池清先生著

記事論説五千題

洋裝美成本全一册
正價金二拾錢
郵劵代用郵税共廿六錢

少年諸君能ク文ヲ綴リ章ヲ編ミ錦句繡吻吾々ヲシテ感ゼシムルノ多シ是教育其宜キヲ得ルガ故ナリト雖之ガ參考ニ供スル處ノ作文書ノ力ヲモ亦大ナリト謂フベシ此書ハ小池清先生ノ撰ニシテ初學適實ノ錦編玉章ノミヲ集メ日用門書簡門記事門論説門傳記門等ノ諸部ニ分チ上欄ニ加フルニ初學者ノ必ズ心得ベキ文章組立法ヲ以テシタレバ一度卷ヲ繙ケバ初學者ノ文才必ズ煥發シ錦上花ヲ添ユルノ觀ヲ呈スルニ至ルヤ疑ヒナシ

春廼舎おぼろ著

贋もの

洋裝美成本一册
正價金拾三錢
郵劵代用郵税共

世に小説の數頗る多し然れども他人の案を翻したるものにあらざれば躰を奪ひ骨を換へて彼是縫ひ合せたる贋ものゝみ多かり此書は米國のカサリン、グリーン女史が綴りたる探偵乃話しと謂へる物語を春廼舎大人が閲して面白しと感じ給ひしを這たび諸君に頒分せむとても乃されたる者なりされば文の名は贋ものと名づけしもでい物語の事實に因りて斯くせしまでにて其實面白き新規乃探偵小説なれば早く一卷を購ひて贋ものが贋ものの小説にあらさるを知り給へ

熊谷直好大人歌集

浦のしほ貝

附拾遺

全二冊　正價三拾錢　郵稅拾錢

本書從來は刻本は大本數卷にて便ならず依て本社之を活版に付き廉價を以て頒賣す

高等尋常中學校　師範學校
特別認可學校其他諸學校
受驗用
參考書

理化學試驗問題答案

全一冊　正價貳拾錢　郵稅四錢

本書は理化學的の諸問題と答案を網羅し試驗の時は用意に供するに必要れ書なり

小野道風眞蹟

秋萩帖

全一冊　正價拾五錢　郵稅四錢

有名なる小野道風は眞蹟を精巧なる彫刻の伎力に假りて一の墨帖とおしたるも乃なるが故に書道習字を學ぶ人〳〵には必要乃もれなり

伊藤洋二郎著

教育叢書

通俗教育演說

（第四版）

全一冊　正價拾五錢　郵稅四錢

教育上に關する事項を演題として演說したる所を即ち言文一致体の文章に記き演說初心の人と雖ども本書を讀めは即座に演說の出來得べき珍書なり

板倉政信君著

代數理論問題集

全一冊　正價七錢　郵稅貳錢

本書は在來の問題書と異なり諸問題を網羅し試驗用に供するに必要の書なり

前尾張市禮式師範
本家　正　小笠原國豐大人閲　渡邊良雄先生著

教育
実用書

日本諸禮式

諸禮に關する事項を平易に記し且つ多くの繪を挿みて禮容を示したる人間必讀の寶典なり

全一冊　正價貳拾錢　郵稅四錢

竹田晨正大人標註

標註

百人一首一夕話

本書は往古より世に高評なる定家卿著の百人一首に簡明精確の註を挿入し挿畫は世上畫伯を以て鳴る大石眞寅の描きしものを寫し其標註の如きは竹田大人の辛苦慘憺されたるもとにして和文流行の今日に方りては斯道の有志者には必讀の良書なり

全三冊　壹冊正價三拾錢　壹冊郵稅六錢

教育勅語●軍人勅語

軍歌壹萬集

本書は教育及軍人用新撰の歌を蒐集したるものなり

全一冊　正價金八錢　郵稅金貳錢

風流三昧㊀洒落道場

笑天　をもしろ〳〵し

洋裝美本全壹冊　紙數二百五十ページ　正價金七錢　郵稅二錢●郵券代用八錢

咲地

著作者

三遊亭圓朝。談洲楼燕枝。任天居士。天四居士。十返舍一九。式亭三馬。酔多道士。花の家おらえ。曾呂利新左衛門。左文翁。南柯中人。蛙鳴屋お

種目

ひろ。柳亭種彦。爲永春水

一口ばなし●三題ばなし●滑稽論說●秘事さつ毛●口上茶番●落ばなし●棒づくし●地口●狂詩偏らす口●女郎買客の心得●端唄●同替歌●都々一●大津繪●流行歌●觀智●珍事奇聞●閨怨●滑稽演舌●面白話●情話●滑稽語園●典故釋義●俳偕●短句●狂句●もつとも〳〵●狂歌●ふみ其外いろ〳〵

萬民坐右之實典

日用便覽

全一冊

●特別廉價拾錢
●郵送料金二錢

(目次)大日本地圖●聖上兩皇后皇太子御略記●早見年代記●大祭祝日表●毎月新舊大小表●七値表●求年齢月數表●年中日繰法●廿四方位●陰暦李節一覽表●七十二候の辨●風雨考●潮滿干時刻表●十二月十干十二支の異名●日々吉凶考●各地方廳管轄國郡●著名高山著名大河著名湖沼●里程表●貨幣内外比較●郵便切手貼用規則●郵便爲替料●郵便條例●外國爲替●賦劵印紙貼用規則●訴証用印紙料●煙草税●代言免許料●船税●車税●會社税●牛馬税●賣藥税●度量衡税●版權料●商標登錄●海外旅劵●醫師免許開業試驗●醬油税●菓子税●專賣特許●登記料及手數料●所得税●鹽道荷物之規則●郵船會社滿船發着時刻及貸金表●衆議院議員●貴族院議員●府縣會議員●區町村會議員●市公民●公債及證劵●銀行一覽表●(以下略ス)

新日本之一大現象

奇事聚報

政治 經濟 文學 商業 工業 農業
人情 風俗 傳記 技藝 統計 雜錄

定價一冊金十錢
郵税二錢

粋人之朋友●別嬢之情夫

きはらし

全一冊

紙數三百ページ頗る美本
特別安賣金六錢郵税二錢

此書は當世流行歌①古今はやり歌●どゞ一●はうた●もんく入どゞ一●月琴譜●大つゑ●さわり●かみうた●長うた●江戸歌●ちやりまい●さよ元●ぶんご●とつちりとん●いよぶし●ものまね●あれみやしやんせ●おいわけ●りきうぶし●じんく●きやりぶし●蝋倉ぶし●祝小うたい●川柳●にわか●おとし噺●手品●地口●なぞかけ●さいもん●わはだら●しんない●軍歌●狂詩●今樣●お座附●はうたかへ歌●諸國流行歌●淨瑠璃●大津繪かへ歌●ないものづくし●方言考●みろめたる女におくる文●手堅き女をくどく文●娼妓よりをくる文●藝者にほれられる法●金をためる法●盜難除法●不老不病不死乃法●生涯しはのよらぬ法●安あがり咪まい馳走をする法●其他奇妙奇的烈妙不思ぎな事や愉快な意氣な歌等は漏さず書きあつめたる古今獨歩の珍書なり

實地 應用 **日用百科要法** 全一册

紙數凡四ページ 特別金廿五錢郵税六錢

此書の概略目錄は●家政新智●活計法●主人の心得●女房の心得●奉公人乃使ひ方●勉強と倹約●買物の心得●家内の制限●貯金法●金満家になる法●商買の秘法●得意先を失なわぬ新法●大望を成就する法●立身出世之手段●交際法●交際及對話之注意●人の心中を看破る秘傳●教育新智●家庭教育●小兒行儀仕附の法●小兒養育法●懐姙避姙自在法●随意に男女子を生む法●産前産後の心得●衛生新法●人間生涯無病の新法●諸病必治新法●傳染病豫防法●看病の注意●男女全体の白色法●料理法●西洋料理法●即席手輕料理法●衛生料理法●漬物加減法●菓子製造法●洋酒製造法●百般工藝技術新法●癈物利用法●窮理新智●日月之事●地震之事●年中晴雨を前知する法●暴風雨を前知する法●記憶法●平常に心得べき諸禮式男女交合秘訣●茶の湯心得●活花法●一語千金●金言集●食物撰方の心得●農業法の其他日用有益なる事項は一も漏さず書き集めたる一大奇書なり

- ● 嵯峨の家おむろ著 **豪傑美譚** 全壹册 正價拾貳錢 郵税四錢
- ● 生産起業之資料 社會處生之方針 **商業新書** 全壹册 全拾貳錢 郵税四錢
- ● 桂月園六花著 **尺八獨案内** 全壹册 全拾貳錢 郵税二錢
- ● 製造之良師 發明之材料 **奇術秘法** 全壹册 全七錢 郵税二錢
- ● 小池清纂編 **普通明治文章** 全壹册 全貳拾五錢 郵税六錢
- ● **唐詩選講義** 全壹册 全貳拾七錢 郵税四錢
- ● 牧田虎藏著述 **新撰速記法** 全壹册 正價二拾錢 郵税四錢
- ● **用文教科書** 全壹册 全二拾五錢 郵税六錢
- ● 音曲全書 **たのしみ草** 全壹册 全八錢 郵税二錢
- ● 都々一○端唄 大津繪 **五千題** 全壹册 全八錢 郵税二錢

4
50
277

●音曲の倶樂部 きげんよし 全壹冊 仝八錢 郵稅二錢

●文のしほり 全壹冊 仝四錢 郵稅二錢

●日本支那西洋各種 素人料理法 全壹冊 仝四錢 郵稅二錢

右廣告ノ品目及其他ノ圖書御購求ノ節ハ左記ノ各店中何レヘナリ𪜈最寄御便宜ノ地ヘ御注文被成下着金ノ即日速ニ出荷致シ御送本可申上候以上

發行書肆 名古屋市本町通六丁目 東雲堂本店
發行書肆 大坂市南久寶寺町四丁目九十九番屋敷 東雲堂支店
發行出肆 東京市京橋區中橋和泉町四番地 東雲堂支店

4
211

福島小佐騎馬旅行

022328-000-9

4-211

福島小佐騎馬旅行

五柳　散史／編

M25

ADA-0846